
IS『に』転生ってふざけんな！

出川 戦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS『に』転生ってふざけんな！

【Nコード】

N4278Z

【作者名】

出川 戦

【あらすじ】

この物語は、主人公が福音に転生して様々な困難に操縦者のナターシャと共に立ち向かっていく断である。

第1話（前書き）

完全なる思いつきです。連載という判断で大丈夫か・・・？

第1話

気付くと、俺は真つ暗な空間にただ1人いた。

(なんだ……ここは……？夢の世界ってヤツか？)

「ここはあなたの処刑場です」

女性の声が聞こえた。　　ってちよつと待て！

(なんだよ処刑場って！　ていうかあんた誰だ！？　あれ？声が出ない……)

「私は神様です。ここではあなたは魂だけの存在なので声は出ません」

(ああ、なんだそういう事か……って納得できるか!!)

「五月蠅いですよ」

神様(自称)は冷たい声でそう言った。

「まず説明しなければなりませんね。人の寿命は、その人が生前犯した罪によって減っていきます」

(あ、ひょつとしてそつちの手違いでまだ死なない俺を殺しちゃったからどっかの世界に転生させてくれるとか……って俺死ん

だの!?)

「そうです。あなたは死んだんです。あと、私たちは手違いなんてしません。なんせ全知全能ですからミスなんてあるはず無いのです」

(おおつふ・・・じゃあ、なんで俺ここにいるの?)

「あなたは小学生の時、同じクラスの子からゲームを借りたまま返しませんでしたね?」

(・・・・・・・・)

「さらにあなたは別の子から借りたマンガを返さなかったり、アンティールルで決闘デュエルしたりしましたね」

(・・・・・・・・はい・・・・・・・・)

「さらにあなたは物心ついた頃からつまみ食いをし続けていましたね」

(ちよっと待ってくれ! そんな程度で寿命削られてたのか!?)

「そうですね。積もりに積もった小さな犯罪が実を結んで、こうして10代でめでたくぽっくり逝く事になってしまいましたね(笑)」

(笑)じゃねえ!!何が悲しくて17で死ななきゃならなかったんだよチクシヨウ!)

「あ、一応言っておきますけど、あなたは本当は13歳で死ぬことになってました」

(なお酷いわ!! ……っ、おい。それはどういう事だ?)

「あなたは非常識なほど悪運が強かったので、何度も死神が迎えに行きましたがあなたが死ぬことはありませんでした。なので私が直接手を下す事になったのです」

(……俺って、何度も死神に迎えにいられてたんだ……)

「つたく、役立たずが……。それで、私が直接人の生死に手を出す事はあまり望ましくない事なので、その処置としてあなたをどこか適当な世界に転生させます」

(今、神様が真っ黒になった気が……。っーかこれ、棚ボタなんじゃないか?)

「あなたが思っているほど楽な世界なんてありませんよ。それじゃあせめて行く世界くらいは選ばせてあげましょうか」

(ならISの世界で!ちゃんとIS動かせるようにしてくれよ!)

「誰が貴様のようなゴミ虫の言う事なんか聞くか」

(……あれ?なんかキャラ変わってない?)

「ごたごた五月蠅い! ISですね! それでは逝ってらっしゃい」

(字違う! ……あれ……なんだか意識が遠のいていく)

(・・・あれ？ ーここはどこだ？)
俺が意識を取り戻すと、目の前には何台もの機械と大勢の研究者が忙しそうにしていた。

(あ、まさか俺、ここの研究者にでも憑依転生したのか？それにしても、ここの研究者は外人ばっかだな。外国語なんて何も出来ないぞ、俺)

などと考えていたら、俺の方に向かって金髪の20歳くらいのすげー綺麗な女性が歩いてきた。服装はレオタードのような格好をしている。おそらくアレがISスーツだろう。

(・・・ってちょっと待て！あの人なんで俺の方に来てるんだ！？まさか俺の事が好きなんじゃないだろうか!!！)
その時、俺は気付いた。『俺、さつきから声出してなくね？』と。

そして目の前の女性は・・・3巻末と6巻の初めに出てきたナターシャさんじゃないか！

まさか・・・まさかとは思うが・・・俺、ちゃんと人間に転生してますよね、神様ア！！

「これからよろしくね、シルバリオ・ユスベル『銀の福音』」

やっぱりかああああい！！！！

第1話（後書き）

ウザい主人公ですいません……。

ナターシャは福音の事を「あの子」としか呼んでいなかったのも、最後の方は悩みました。悩んだ結果がアレですが……。

「なんでナターシャが日本語で挨拶しているの？」という質問には、担当者が不在のためコメントできません。

下らない文章になるでしょうが、応援よろしくお願いします。

第2話(前書き)

「作者でーす」

神「神でーす」

「とゆるワケで、今作の前書き後書きは私達2人が進行させていた
ただきまーす」

神「よく神界まで来れたな」

「ほら、作者って言ってみれば神様より上じゃん。言ってみれば
界王様じゃん。だからフツーに来れるんだよ」

神「あ、そ」

「反応薄いなー」

神「じゃあ今回は主人公の生前犯した罪について、まだ書いてな
かった細かいところも説明してさしあげましょう」

「でたよ、上から目線」

神「d m r k s。彼は1話で述べた他に、授業中にマリカしていた
りモンハンしていたりしていた」

「みんなもよくやってるよね」

神「黙れ喋るな息をするな。他にも小2の頃から菓子パンやお菓子
を持ちこんで早弁していた。中1の時は弁当だったので、早弁用の
弁当を持って来ていた始末だ」

「そりゃすごい」

神「あとは・・・昼休みに決闘^{デュエル}していた」

「私もやってますよ、ソレ」

神「さらに小1の時『お菓子あげるからついておいでよ』と知らな
い大人から声をかけられた時に、鼻で笑いながら『今時そんなのじ
ゃ2歳児でもついてこねエよハゲ。警察に突き出されなくなかつた
ら財布を置いてさっさと消えな』と言い放つたり」

「それはひどい・・・」

神「他にも余罪はあるが・・・あまり長くするのもなんだ。これ

「うん、おれは」
「そだね。では本編をどうぞ」

第2話

(これ、終わったんじゃない?)

俺はまずそう思った。本当なら頭を抱えて絶叫して、なにか硬い物に頭部をぶつけてしまいたい衝動に駆られているのだが、なんせ手足が動かない。ついでに言うと口もきけない。なにこのプレイ。誰得?

「これからよろしくね、シルバリオ・ゴスベル『銀の福音』」
俺得でしたw。

(キタだろコレ!)

目の前にいるのは福音の操縦者のナターシャ・ファイルスさん。アニメで出てこなかったのが悔やまれる、挿絵で見た時「なんで2組の鈴がいてラウラがないの?」と思いながらも「なにこの新キャラのまさかのハーレム乱入」とかずつと考えてて6巻で再登場した時にテンション上がった俺の好きだったキャラだ。リアルで見るとすっげー美人。

まあとどのつまり、何が言いたいのかというところ……今、彼女はISSスーツを身につけている。という事は、今からISSに乗ったりするわけだ。

そのISSが何かって? 決まっているだろうこの俺、シルバリオ・ゴスベル『銀の福音』だ!

つまり彼女のナイス・ボディに俺が隙間無くくっつくわけで・・・
・ヤバい。考えただけで鼻血が・・・あ、鼻無いんだっけ。ついでに血も通ってないわ。

(いや、そんなブルツクみたいなのを一人でやってんじゃねえよ！)

などと俺が至極どーでもいいことばかり考えて興奮していると、ナターシャさんは俺の頭？の部分に優しく手をかざした。

「・・・・・・・・？」

「どうかしましたか、ファイルス？」
研究者の1人がナターシャさんに尋ねたが、ナターシャさんは「いえ。何でもないわ」と答えた。

「・・・・・・・・つか、英語で喋ってるんだよな。なのに普通にわかってるぞ、俺。やっぱりISになったから頭の方も良くなってるのかもしれない。」

「(気のせいかしら・・・・・・・・。いつもとISの反応が違うような気が・・・・・・・・)」

初期化と最適化が終って気付いたのだが……ISの装甲には、俺の感覚というものが通っていなかった……。

どういう事かというところ、俺は初め、ナターシャさんの身体に密着するということに対して興奮していたのだ。福音は装甲部分が結構多いから、ほとんど全身を同時に触っていられるという変態的思考で考えていたのだ。

だが現実には違った。

ISの装甲部分に感覚が無いという事は、触っている感触もクソも無いのだ。ただ意識だけがISの中にある　今の俺はそういう状態なのだ。

(期待した俺が……馬鹿だった)
心底俺はそう思った。

「ファイルス、調子はどうか？」
オペレーターの女性がナターシャさんに訊く。

「うーん……なにか、違和感を感じるのよ。まるで誰かが私のすぐ近くにいるような……」

当たらずも遠からずです、ナターシャさん。俺がその誰かです。福音です。

「まだ一次移行もできてないし……チーフ、一度コアをリセットするべきではないでしょうか」
ファースト・シフト

（……は！？ ちよつと待ってくれ！ もしコアがリセットされたら、俺はどうなるんだ！？ このまま何もせずにナターシャさんを間近で見られてお終いか！？ あ、冥土の土産に丁度いいかも……ってそうじゃない！ せつかくなんだからこのままシヤルやラウラたちとも会わせてくれよ！ 臨海学校編ですよ！）

ISには、意識と似たような物がある……そう言ったのは、たしか山田先生だ。

その意識が俺だとしたら、コアのリセットは俺の消失に繋がりがねない。だから一刻も早く俺はナターシャさんの専用機にならなければならぬんだ！

（がんばれ俺！ やればできる！ どう頑張ればいいのかわかんねエけど！）

とりあえず一次移行が終了するようにと俺をこんなのにした誰かさんに祈りを捧げると……

『フォーマット フィットティング
初期化と最適化が終了しました。確認ボタンを押して下さい』

ディスプレイにそう映し出されたのが解った。

「っえ！ さつきまで両方とも進行度がたった3パーセントだったのに……!?!?」

そんなバカな。あれからけっこう時間経ってたぞ。なのに3パーセントおかしいだろ。機械壊れてるんじゃないか？

「まあいいわ。それより、一次移行が済んだんだから早くテストを始めましょう」

ナターシャさんは研究員に向かってそう言った。

(ん？テストって……?)

俺がその疑問に気付いたまさにその時、目の前のシャッターが上がり、奥の戦闘スペースと思われる東京ドーム何個分かの広さの楕円形のスペースが姿を現した。

(これは……ISのバトルフィールドか……?)

アニメで見たアリーナの地形と酷似しているその中に、ナターシャさんは迷い無く俺を連れて行く。

今で解ったが……どうやら、福音の操縦はナターシャさんによるそれが優先されるようだ。つまり、俺の意志は在って無いようなモノ、か……。なんだか悲しいな。

(まあでも、間近でISの戦闘が見られると思えば、少しは気も楽になるってか)

俺はISはアニメから入った。2話目を観て、すぐに原作を買った。

その理由は、アニメで観たISの戦闘シーンがすごく面白かったからだ。原作には軽く失望したが……。

キャラも可愛かったから好きだが……やっぱり、俺の中では戦闘が一番だ。

だから別に、俺自身が戦闘に参加できなくても構わない。すぐそばでアメリカトップクラスの操縦者の戦闘が観戦料タダで見続けられるんだ。こんないい話はそう落ちてないねきっと。

……はい。強がりです。自分も専用機持つてこの大空に翼を広げ飛んで行きたいです。翼をください。屋内なので大空は見えませんが。あと翼はもうありますが。まだ二次移行してないから機械つぽい多方向推進装置ですけど。
マルチスラスター

とかなんとか考えてる間に、俺とナターシャさんの正面にネイビーカラーのIS アレは、フランスの第2世代型の、ラファール・リヴァイブか が現れた。

（まさか、いきなり実践っていうヤツじゃ……ないわけないか）
思えば一夏もそうだった。いきなり代表候補生のセシリアとタイムンで闘うという無謀な挑戦だった。

だが俺は一夏の二歩三歩先に行く！ なんて言っただって、こっちは専門的知識すら単語一つも理解してないどころか見てすらいないんだからな！

（とか何とか言っても、ただ見てるだけなんですけどね）
向こうは第2世代型だから多分一瞬で勝負が着くかな、と俺が思っていた時だった。

リヴァイブがアサルトライフルのロックを外したのが伝わって来た。これは撃たれるな。

だがこっちの操縦者はアメリカで最強のIS操縦者の1人だ。さらにこの福音は高機動と高火力を兼ね備えた機体だ。

こんな牽制なんて華麗に避けて迎撃する間もなく反撃してくれるに
違い

バカアアアンツ！

バリアー貫通、ダメージ89。 シールドエネルギー残量、911。
実体ダメージ、レベル中。

（痛てエ！！？ なんだコレ！？ 感覚ないクセに痛覚だけあんの
かよ！！！）
俺は脚部に感じた痛みに戸惑いながら、なぜナターシャさんが避け
なかったのかを即座に考えていた。これもISになったお陰なのか
？すぐに最善の判断ができるんだけど。

で、その結果浮かんできた仮説が……『俺の動く意志に比
例して、ナターシャさんの反応が福音へ伝わりやすくなった
りにくくなったりする』というのが真っ先に浮かんだ。

（ちょっと待ってくれ！ 俺は戦闘訓練なんて全くやって無い、ズ
ブの素人なんですけど!?!?）

あと、今の俺は福音に搭載されているハイパーセンサーで全方位が
視覚として認識できるんだけど、研究者の皆さんがなにやら不穏な
動きを見せてるんですけど……。

（まさか、コアのリセットか福音オレの廃棄処分についての判断じゃな
いだろうな……!!?!?）

第2話（後書き）

「おっと、まさかの3話目で完結か？」

神「いやさすがにそれは……」

「そういえば、彼がなにかあなたに祈ってましたけど、何かしたんですか？」

神「特に何も。やろうと思えば何でもできるけど」

「……それにしても、このままだとホントに次で連載終了すんじゃないか？」

神「大丈夫だろ。ドラゴンボールの悟空や悟飯だって何度も死にかけてるのに、蓋を開けてみれば死んだのは悟空が2回だけじゃないか」

「身も蓋もない事言っなよ。盛り上がらないだろ」

神「そういう発言は控えるよ」

続く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4278z/>

IS『に』転生ってふざけんな！

2011年12月16日01時53分発行